

## 「あまおう」9月の管理

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は平成29年8月9日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

### 【今後の管理のポイント】

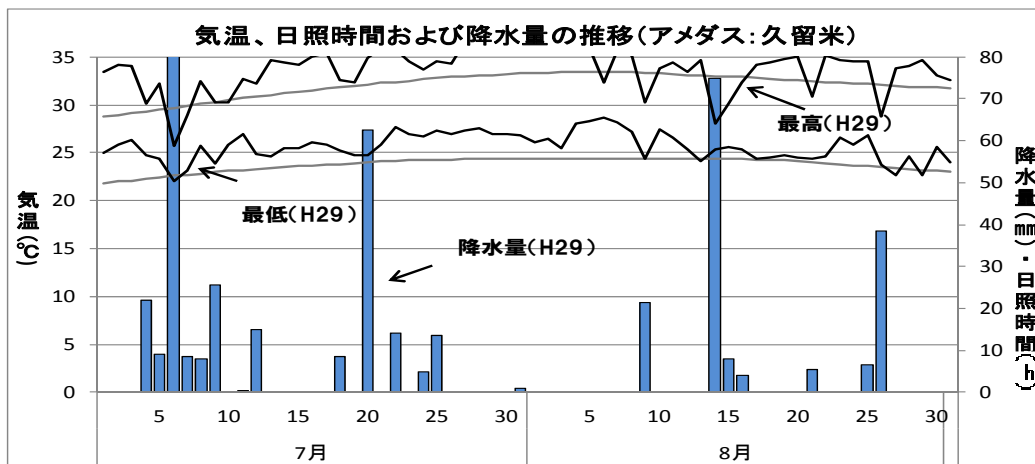
- ★10月初旬で、最大葉（横）8.5cm程度の生育を目安に
  - ・花芽分化確認後の適期定植
  - ・2番果房分化促進のための寒冷紗被覆（早期作型）
  - ・ハダニ類対策

7月上旬の大雨の影響で一部根傷みが見られ、苗の充実不足が目立ちました。8月には天気が回復し、苗質も徐々に改善されましたが、梅雨時期の生育遅れの影響で例年よりやや小ぶりな苗の仕上がりとなっています。

今後も高温傾向で推移するとの予報がでています。普通ポットは窒素欠乏や花芽分化の遅れが懸念されますので、定期的な液肥の追肥と寒冷紗被覆を行って下さい。

病害虫では、梅雨明け以降の高温乾燥により、「アブラムシ類」や「ハダニ類」の発生が見受けられます。また、「炭そ病」も散見されます。病害虫を本ばに持ち込まないように、発病株の早期発見・早期除去並びに防除の徹底に努めて下さい。

### 【気象の経過】（アメダス久留米より）



### 気象予報と今後の見通し

#### 【気象予報】

福岡管区气象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

- 1か月予報（九州北部地方 予報期間：9月2日～10月1日 発表日8月31日）

[気温] 20 30 50

凡例:

[降水量] 30 40 30

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

[日照時間] 20 40 40

## 【今後の見通し】

気温は平年より高く、降雨量は平年並、日照時間は平年並か多くなる可能性が高い予報です。

### 育苗管理（普通ポット）

- 体内窒素が切れると、定植前に草勢が落ち込み早進株の発生が多くなりやすいので、生育状況を見ながら、既に肥料が切れているほ場では液肥等で追肥を行う。
- 根張りが悪い（根傷み・根量不足）場合は、回復するまで葉面散布（OKF-1 1,000倍、メリット青500倍など）を2～3回行う。
- 花芽分化安定のため、8月下旬頃から寒冷紗被覆を行う。

### 定植

- 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根傷み防止のために、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げる。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20～23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化程度（表1）になってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番果房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。

表1. 定植日と花芽分化程度を目安

定植日	花芽分化程度
9月10～14日	分化～ガク片形成
9月15～18日	分化～ガク片形成
9月19～22日	分化
9月23日～	肥厚後期

### 定植後から二番果房対策までの管理

#### ◎早期作型（株が旺盛になりやすく、二番果房が遅れやすい）

- 寒冷紗被覆

#### 株づくりのため活着後寒冷紗を一旦剥ぎましょう

活着促進のため、定植から7日間程度被覆を行う（表2）。活着後は、株づくりのため一旦寒冷紗を剥ぎ、日光に当てる。

9月下旬～10月上旬頃に二番果房分化対策のため、寒冷紗を再被覆する。

#### 寒冷紗被覆の目安

1回目：定植前から活着まで（7日程度）

2回目：9月下旬頃から二番果房分化確認まで

- かん水

#### 二番果房対策に向けて徐々にかん水量を減らしましょう（図1）

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後は、勢いをつけすぎないように徐々にかん水を控える。ただし、極端に乾燥させすぎると生育が遅れるので、土壌水分を見ながら適宜行う。

- その他

追肥は、二番果房の花芽分化を確認してから行う。

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

表2. 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

（裏面へつづく）

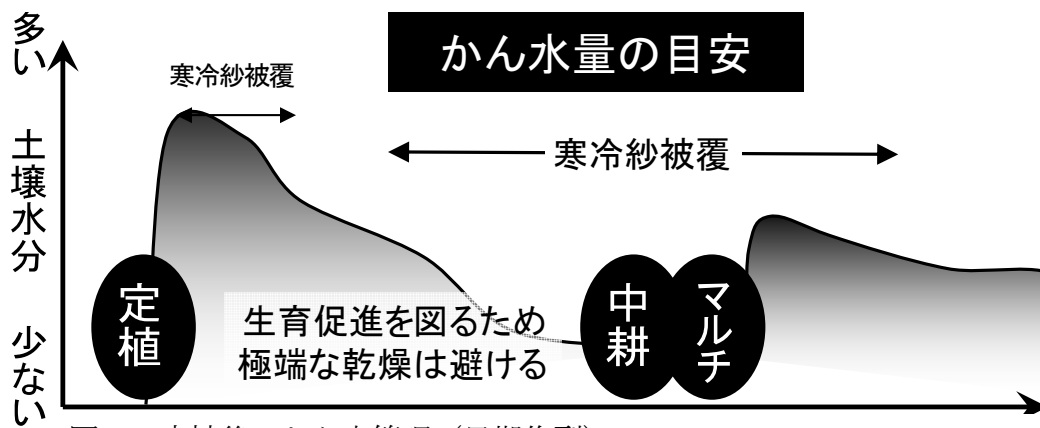


図1. 定植後のかん水管理（早期作型）

### ◎普通作型（二番果房が続きやすい）

充分なかん水等により生育促進に努め、二番果房対策は行わない

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後はかん水制限や寒冷紗被覆による生育制限は行わない。

活着不良などで生育が悪い場合、葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

### 病害虫防除

害虫は発生初期の防除、病害は発生前の予防散布が重要です。

定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始めます。

#### 【炭そ病】

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、絶対に使用しない。
- 定期的な予防散布を徹底する。

#### 【うどんこ病】

- 定植後からビニル被覆まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなる。寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため特に注意する。

#### 【アブラムシ】

- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 発生初期からの防除を徹底する。

#### 【ハスモンヨトウ・オオタバコガ】

- 発生初期の若齢幼虫時（体長1cm程度まで）の防除が重要である。
- 大豆畑周辺のほ場では、特に周辺からの飛込みが多いので注意する。

#### 【ハダニ類】

- 高温（25～30℃）ほど増殖力が高い。
- ナミハダニはイチゴ苗上で生活する（ほ場周辺からの侵入はほとんど無い）。葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなるため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、特にしっかりと防除する。
- 天敵のチリカブリダニを使用する場合は、影響が長い農薬の使用を避ける。

# トピックス 「殺虫剤による防除について」

ヨトウムシやアオムシなど、葉の食害を引き起こす害虫は春、秋に発生します。特にイチゴの定植時期は、これら害虫の発生時期と重なるため、殺虫剤による防除が重要となります。ヨトウムシ等は卵期や幼齢期での防除が効果的であるため、適期防除を徹底しましょう。また、薬剤の種類に注意し、効果的な散布を心掛けましょう。

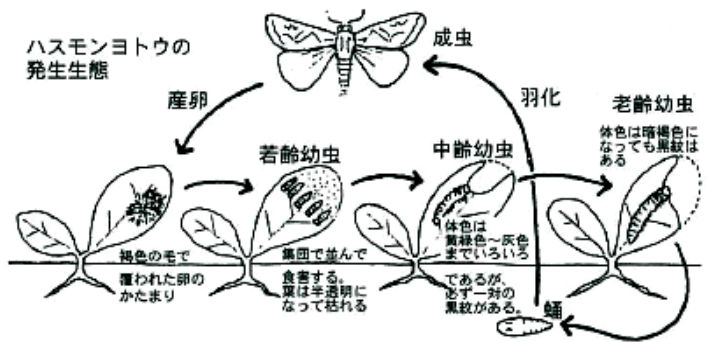


図2. ハスモンヨトウの発生生態

## 【殺虫剤の種類】

- 接触剤：直接害虫にかかる、もしくは散布された場所に害虫が触れることで効果が表れる。この種の薬剤は散布むらのないよう、丁寧に散布する必要がある。  
(例：プレオフロアブル、マッチ乳剤 など)
- 浸透移行性剤：根や葉から吸収され、植物体内を移動する薬剤。その植物を加害した害虫に効果が表れる。  
(例：モベントフロアブル、プレバソソフロアブル5 など)
- 交信攪乱剤：化学的に合成した性フェロモンを充満させることで攪乱を起こし、対象害虫の雄と雌の出会いを阻害し、次世代の発生を抑える。  
(例：コンフューザーV)

<登録内容の抜粋（コンフューザーV）>

作物名	使用目的	適用病害虫名	10a当たりの使用量	使用時期	使用方法
野菜類	交尾阻害	オオタバコガ ハスモンヨトウ ヨトウガ	100～200本/10a (41g/100本製剤)	対象作物の 栽培全期間	作物の生育に支障のない高さに支持棒等を立て支持棒にディスペンサーを巻き付け固定し圃場に配置する

**農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！**